

## 横浜善光寺十八羅漢

「羅漢<sup>らかん</sup>」とは、たいへん厳しい修行の結果、「阿羅漢果<sup>あらかんか</sup>」という最高の悟りの境地を得た、尊敬に値する人のことをいいます。その意味ではお釈迦さまは、最初の羅漢となった方です。完全な悟りを開かれたお釈迦さまは、さらに別格の「仏陀」と呼ばれるようになり、生前のお釈迦さまに直接説法を聞いて悟った十六人の高弟たちのことを「羅漢」と呼ぶようになりました。お釈迦さまの教えをまとめた最初の経典をつくった方々でもあります。

坐禅瞑想をする禅宗は、お釈迦さま当時の雰囲気の色濃く残している宗派で、後に羅漢像は、禅宗関係の寺でよく見うけられるようになりました。その像は一体ではなく、十六羅漢とか五百羅漢という名で数多く作られたり、描かれたりします。涅槃<sup>ねはん</sup>に入らず仏法を護持し、すべての人びとを救う使命をお釈迦さまから託され

た十六羅漢は、そもそも玄奘の訳した『法住記』(阿羅漢難提蜜多羅所說法住記)にもとづいて、唐代に絵画や彫刻に表されるようになりました。道元禪師も中国の天台山や天童寺などの寺院の羅漢像を見て、帰国後ご自分の寺にもまつられました。

羅漢像には禅月様、張玄様といった二人の高僧の図様が中心ですが、どの羅漢も、とても怪異で奇妙なお姿をしています。菩薩のように美しい崇高なお姿とはまた違って、妙に人間臭くて、不思議な親近感を感じる表情をしています。だからかえて民衆に広く信仰され愛されるようになったのでしょうか。

さて、十六羅漢とは、どのような方々だったのでしょうか。親しみやすく、羅漢さんとお呼びしてご紹介しましょう。

第一尊者は、賓度羅跋囉惰闍尊者です。おピンズルさまとってよくお堂の隅に、台所にいらっしゃいます。台所——つまり財政を護る羅漢さん、また、痛いところを直してくれる羅漢さんとされています。十六人の中でも一番有名で人気のある方で、しばんだ目の底の深い光が、「クヨクヨつまらんことを考えるんじゃないよ」と語ってくれているようです。この尊者が、「常に世にあつて涅槃に入らず、正法を護持すべし」と他の羅漢さんたちに命じられたそうです。

第二尊者は、迦諾迦伐蹉尊者です。全身しわだらけでにこやかな笑みを称えています。枯れ木のように静かに、安らかで、とらわれのない心を教えてくれます。

第三尊者は、迦諾迦伐釐墮闍(迦諾迦跋釐惰闍)尊者です。我忘の境地、精神の

空白、放心状態——空気と溶け合う一体感を教えてくださいます。

第四尊者は蘇頻陀尊者です。十年、二十年、百年、千年…宇宙の始まりから終わりまで永遠にお座り続けている様なお姿です。肩はまるで植物のように動きません。尊者自身、一つの植物と同化していらつしやるようです。

第五尊者は、諾距羅（諾矩羅）尊者です。私たちの心の内の暗いもの——苦惱、不安、恐怖、羞恥、それらはすべて実は存在しないものなんだよと教えてくださいます。

第六尊者は、跋陀羅尊者です。すべて我々は人間であり、豚であり、同時に宇宙であり仏なんだよと語っているかのようにです。

第七尊者は、迦哩迦（迦理迦）尊者です。その長い眉毛を宇宙意識とのアンテナにしているようです。宇宙と我々は同根であるという真理を感じ取られています。

第八尊者は、伐闍羅弗多羅尊者です。仏滅するのち、古代インドにおいて、千人の従者を従えて仏法の守護と人々の救済に任じた羅漢さんです。

第九尊者は、戍博迦尊者です。「人間は自分中心にしか物を見ようとしませんが、それではいけない。別の反面、自然の側・無の側から物を見よ。そのとき物の価値観は全く転換するのだよ」と教えてくれています。

第十尊者は、半托迦（半託迦）尊者です。仏舍利を供養するとき、その仏舍利が光明を発するという不思議な力の持ち主です。愚鈍といわれた注荼半托迦（周利槃

特）尊者の兄で、この兄弟は故郷の路上に産み落とされたそうです。深い悲しみを超越した悟りの境地に至ったとき、龍を制するほどの神通力が授けられたといいます。

第十一尊者は、囉怛羅（羅怛羅）尊者です。悪や不正、邪悪な心に対して、怒りを表す羅漢さんです。いい加減な生き方、命を尊ばない生き方をする人間に、ものすごい気迫で、喝！——強烈な叱責を与えてくれます。この羅漢さんは、実は生前のお釈迦様の長男です。成道後、帰郷したお釈迦さまによって出家させられ、二十歳で具足戒を受けました。仏十大弟子の一人で、密行第一と称せられました。修行時代、便所に宿泊し囉怛羅のために、仏が廁屋根にて説法した話が伝えられています。

第十二尊者は、那迦犀那（那伽犀那）尊者です。「人間というのは天地の創造物。それはすばらしいことじゃないか。そのすばらしさを天地に代わって祝福しよう」といつてくれているようです。紀元前二世紀後半のインドの仏教僧で、バラモンの教えに意義を見いだせず、尊者ローハナのもとで修行し、ついには三蔵を修めたといわれます。ギリシャ人のバクトリア王メナンドロスと討論をして、仏教に帰依させたという記録が残っています。

第十三尊者は、因掲陀尊者です。己の中の欲望をこらしめる「杖」、知恵を磨く「本」、そして仏の慈悲の象徴である「数珠」という三つの道具を持っています。ひととき

もとどまらない厳しい自省の心を持つ羅漢さんです。

第十四尊者は、伐那婆斯尊者です。どんなに悲しい思いも、憎しみやみにくい嫉妬も、すべての煩惱は、ただこの羅漢さんの前にいるだけで消えていくといえます。

第十五尊者は、阿此多（阿氏多）尊者です。弥勒が当来成仏の記（予言）を受けるとき、自ら転輪聖王たらんことを志願したといわれます。宇宙の流れの中で自然に生きている羅漢さんで、子どもから知識人まで、すべての人が魅きつけられます。

第十六尊者は、注茶半托迦（周利槃特）尊者です。兄の半托迦とともに仏弟子となりましたが、兄が聡明なのに比べて愚鈍であったので、愚路と呼ばれました。しかしこの尊者十六羅漢さんの中でもとくに親しまれ、人気があるといわれています。注茶半托迦は、あまりにも覚えが悪いので、修行する資格がないといわれ、寺から追い出されそうになりました。お釈迦さまは哀れに思い、一本のホウキを与え、「塵を払い、垢を除く」と唱えて、毎日掃除だけ一所懸命にしなさい」と教えました。いわれた通りに毎日毎日朝から晩まで、その言葉を唱えながら掃除に励むうちに、あるとき、「塵や垢は心の煩惱である」という悟りの境地に達することができました。こうして、どんなに愚かな者でも、修行と努力によって悟りを得ることができるのだということを教えてくれる羅漢さんとなりました。

以上、十六人の羅漢さんはそれぞれに、仏法の真理、宇宙の真理を私たちに教え

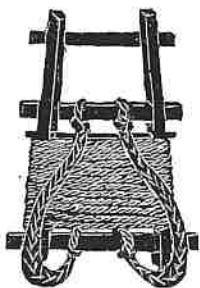


周穎先生

てくださっています。

横浜善光寺では創立三十周年を記念いたしましたして、十六羅漢に、最強で最高の聖獣といわれ、雲を呼ぶ龍、百獣の王であり風を呼ぶ虎、この最も強いものとされる仏教の守護神・龍虎の雄々しい姿を組み合わせ、『横浜善光寺十八羅漢』の屏風を制作いたしました。これは、中国の若手の中でも、最も現代感覚の優れた画家で、中国上海人民美術出版社の周穎先生に描いていただいたもので、今までとはまた違った斬新な羅漢像が見事に示された四枚の作品に仕上げていただきました。

一人一人の羅漢さんが、今にも目の前にいる私たちに語りかけてきてくれそうな、そんなふうに感じていただけることと思います。



## 横浜善光寺十八羅漢圖題辭



横浜成寿山善光寺自昭和四十四年開創以來、已歷時三十春秋矣。為慶賀開創三十周年及育英會設立十五周年之盛典、住職黒田武志老師發願請繪十八羅漢圖入寺供養、余乃奉囑恭請中國上海畫師周穎先生為之、得以玉成也。蓋羅漢圖者、史伝有二大流、一者貫休、二者李竜眠也。而周此画当属前者、此十八尊者皆胡貌梵僧、骨相嶙峋、微妙難

言也。周擅花卉、鳥獸、魚蟲、山水、尤精於人物。其筆墨清雅、画意高遠。斯作深得禪月精髓、良可寶之。再者、大凡羅漢圖多為十六応真、而此作繪成十八、更為罕也。羅漢者、乃為聖教真僧、諸漏悉尽、具大神通、若有發心供養者、其人福德不可計量也。黒田堂頭荷佛慧命、披忍辱鎧、道心高邈、願憑斯因、冀世界平和、佛法昌隆、善光寺

法水長流、法燈永明、所願如是也。

平成十一年歳次己卯正月初一吉日

法音奉嘱拝題

横浜成寿山善光寺は昭和四十四年開創以来、すでに時は三十の春秋をへたり。開創三十周年及び育英会設立十五周年の盛典を慶賀する為、住職黒田武志老師が発願し、十八羅漢図の絵を入寺供養を欲せんと、余が乃ち嘱を奉じて、これを成すことを中国上海画師周穎先生に恭請し、以って玉成することを得た。蓋し羅漢図という者は、史に二大の流れがあり、一つは貫休、二つは李竜眠なり。しかも周のこの画がまさに前者に属し、この十八羅漢は皆胡貌梵僧であり、骨相は嶙峋として、微妙にして言い難く。周は花卉、鳥獸、魚蟲

山水を擅し、尤に人物に精した。その筆墨が清雅で、画意は高遠である。斯の作は禅月の精髓を深く得て、まさにこれを寶にするべし。なお、大凡、羅漢図は十六応真のが多い、しかし、この作は十八と成し、更にまれであろう。羅漢というのは、すなわち聖教の真僧であり、諸漏悉く尽し、大神通を具する。若し発心して供養する者が在れば、其の人の福德は計らざるべからずなり、黒田堂頭は、佛の慧命を荷い、人辱の鎧を披り、道心が高邈たり、願わくは、この勝因をたよつて、世界平和、佛法昌隆、善光寺法水長流、法燈永明を冀う。所願如是なり。

平成十一年歳次己卯正月初一吉日

法音嘱を奉じて拝題す。